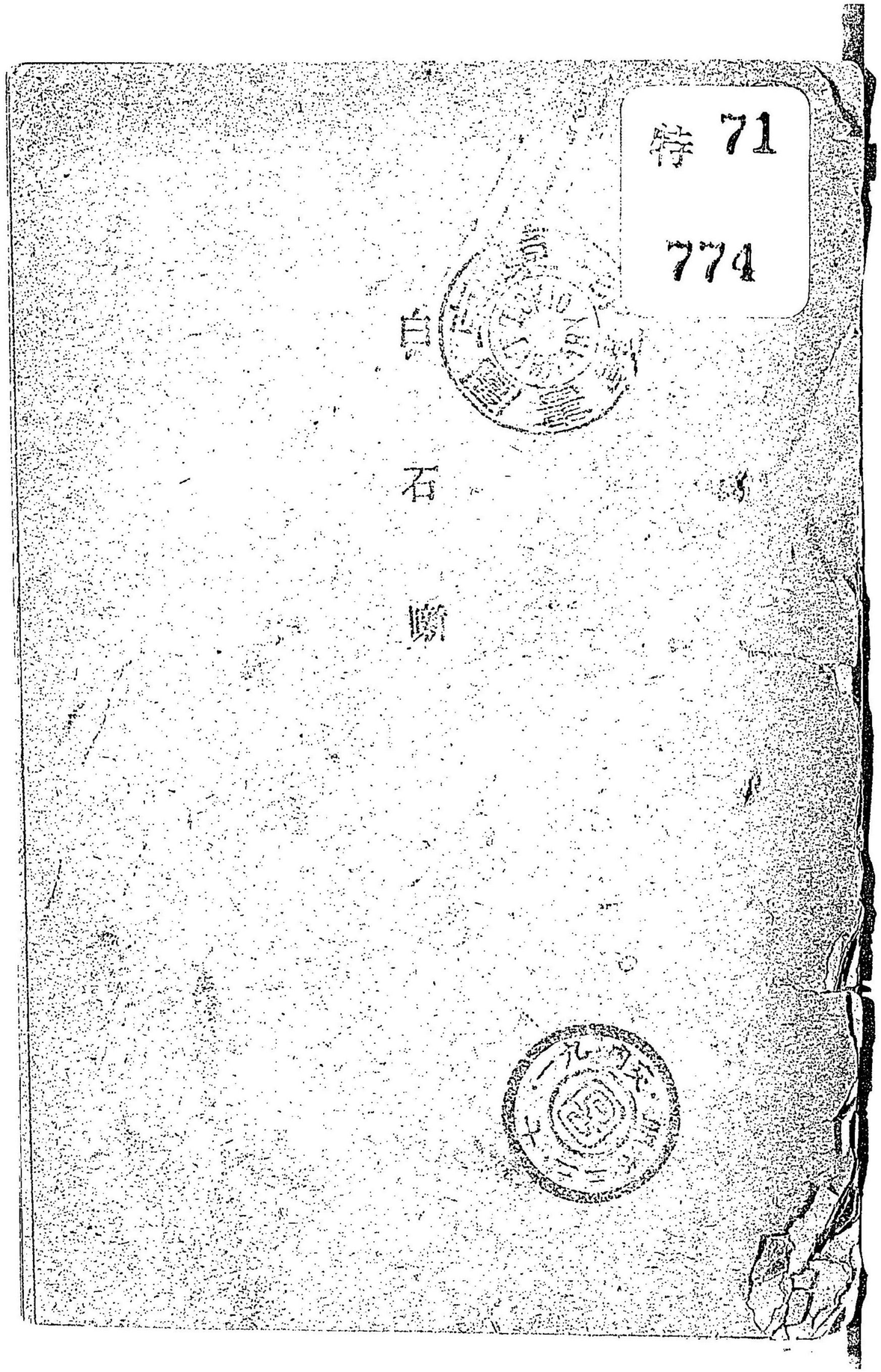

301357-001-9

特71－774

碁太平記白石嘶

M22. 7

DBQ-0001

特71
774
No 18364/22

碁太平記白石噺

新吉原の段

一

入相の鐘さへ早く、れ果て廓の中は万燈會かぶの菩薩の色揃ひわけて全盛宮城野が部屋は上品與二階たんす長持鏡臺の埃取迄綾錦福さ成ける有様也此君の一字也共次の間から宮里宮柴打連て　詞「太夫様御機嫌はへホンニ先刻に借本屋がさんじて先度の曾我物語の次じゃと云て置ていんだぞへィヤ申宮柴様けふのお客は中の町の鳶屋からゞからんだ二人一座宮城野様はもとよりお前も早ふ身仕舞してヲヽせはしな今身仕舞をするわいな併差合な顔はないかへィヽエどれも〳〵侍衆一人のお方は器量よし今一人は髭むちや目の大きい態か人かといふ様などちらへ札が落ふやらいやな事ではないかいのと何國の浦も容嘲そーるも廓のならはしかや　詞「ア、コレ其な事云てやりて衆が叱ぞへヲヽ叱つたてヽあたおかしいィヤおかしい次手にきのふ旦那様が浅草でかヽへて戻らしやんした奉公人おかしい物言ではないかいなサイナア遠い國から姉を尋て登つたとの噺し宮城野様の慰さに連てきてお目にかけよお前もお出と連立て行後かげ見送りて

白石噺新吉原

デモ偖もわざ〳〵徇物いふてマアよい氣では有程にのコレ〳〵しげりそなたはうこら片付やと云付る間も有やな〜新造二人が伴にいやがる者をむり無躰突出されたる田舎の娘傍きよろ〳〵終に見錦の小方三ッ蒲團與さめ顔に　詞「ヲヤ〳〵〳〵女郎さあ達人が寐そべつて居る所を用さア有來とら〜と二階さあぶち上てこりやマア何たる所だどこもかも光り申ておしやらくの櫛さや見様に塗こべゑた笥簞ざア其上に夜の物も金切たモしやア蒲團も蘇木染の色のよさ私らアねまつたらあくとのあかぎれさア引か、つてうつ切べいおやつかなたまゞ申〳〵と云ければ打轉る程おかしさ隱し　詞「コレ其所お子お前の古郷國所爰へどふしてお出だ譯咄して聞さんしよばお力とも成にもなぶると知すしく〳〵泣　詞「ヲヽやさしな詞お云り申私ら國さアゝ奥州だゝアやがアまよ様子有て別れ申てお江戸さあはあらく盛る所ろだアと聞其うへ姉さア此吉原で名高い女郎さアに成て居をるとのはなし女わらしの身とーて敵ない思ひをして尋ねてくるも海山物語りの有聖聞て哀を添てたべ　詞「ヲヽモ何を云じややら判然と譯が知

ぬそして吉原で名高い女郎を姉様とは雲つかむやうな尋者サアろれだから頼中は昨日觀音さまで目眼のおつかない人が連て行て逢してやらうと籠さアに乘てくる所を是の御亭の世話さアよ成中て夕べから居中脚かけ中も他生の縁ほんでおざるはよ赤はらはたれ中さぬちやアホヽヽ聞ば聞ほどおかしい咄そーて今の赤はらとはあられもないと若い同士糠もくづるゝ高笑ひしる人ぞしる宮城野か押ーづめて申お二人浪花の蘆もいせの濱荻所所で替る物云其樣に笑ぬ物　詞「今あの子の云てじやあつただゝやアがアまといふはな爰で云とゝ樣か、樣又赤はらといふてじやは嘘はつかぬといふ事じやわいな扨てもがをれよう御存チヽ知たもむりか憂臥は夜毎日毎にかはる枕心つくしの果は愚興のとろくのお客よも馴親しんだ身の一德　詞「ヲヽ其客で思ひ出した興のお客が喧しかろ私も追付そこへ行先へお出てよい樣ヨコレ〳〵しげり中の町の井箇屋へいての昨日の返事聞てをじや早う〳〵と云下からやり人の取が例のしやぎり　詞「興のお客のお待かね何噺して居さんすぞいのふチヽせはしそんなら私らも興へ往

お客撰のあよもいはず寐ろべる度よ〳〵何やらチヽろれ赤はらたれて氣に入て日がら頼もと口じ〳〵よ云て坐敷へ行ふりを見やる宮城野おのぶが倒若や夫ぞと摺寄て　詞「先刻にからの噺しをきけば姉を尋る人そうな興州は何處の生れ何と云所じやへ　詞「アイ興州は白坂近在逆井村と云所ヲン其逆井村と云所に興茂作といふお人が有うがのアイサ其興茂作といふのはめらしがだゝアア夫なら私が妹と縋り寄を突退て　詞「イヤ〳〵〳〵がアまの常に云はしやるには姉さアの方にもーるしが有ろれを證據に名乘合委細心底打明ろと云イめしたそれが有なら早うつし出ま見てくんされ姉さアとなつかーながら油斷なきヲヽ利口な人疑やるも尤と立て簞笥の袋棚襖開ばうや〳〵しく淺草寺の觀世音扉表具におしならべかざり置たる筒守り見りに妹もとし濕し首にかけまく壺井の守　詞「コレ〳〵此姉が國を出る時かゝ樣が大事にせいと下さんした此守とゝ樣は楠家の御涙人故河内の國壺井八幡樣の御守それを持て居やるからは妹じやー〳〵コレ〳〵ようを見せてたもいのうヲヽ姉さアでおざるかいの遇たかつたと諸共

に嬉しなつかし縋り寄外に詞は泣計斯ぞといざや宮城野が座敷へ出ぬをふしぎさに來かゝる亭主宗六が樣子有ゞな部屋の体忍で事を立聞共知ず姉妹ひろ〳〵噺〳〵　詞「ヲヽ妹よう尋ねて來てたもつた年端も行ぬそなたとゝ樣成とか、樣成といづれぞ付てお出で有ふもし道中ではぐれてかと問れてわつと聲を上　詞「ァヽコレ〳〵〳〵斯周逢からは悲しい事も何もない泣ては濟ぬサァどふぞと尋る姉の心もろゝろ　詞「ェヽ遠國隔つた姉さァ夫で何にも知ないナだヽァは五月田植の時分代官志賀臺七と云惡侍にヤァ〳〵〳〵何といやる打切れてお死よやり申たヤァと恟り差込癪　詞「とつともウ惡い時夫て何じや其跡はサァおらだけもすんでの事殺さるゝ所庄屋の伯父が駈つて來てりきんで見ても肝心の證據なければだゞァは犬死雉子と鷹なりや敵討の勝負もならずすおら〳〵そんだの云号の沒亭にも對面はしたれ共是も此江戸さァへ歸りヤス跡はおらだけとがァまとばかり便ない身に下待の大病ヤァお煩ひても有たかいのシテ沒本腹なさつたかイヽェ〳〵六月十六日よ悲しや終にお死にやりヤたヤァ〳〵御養生

も叶はなんだかサァ噺しさァ聞てさべろない歎かつーやる物直に見とらへたおらだけが心ェヽコレ泣つーやるは道理だけれど便に思う姉さァ又病氣おゝーては猶か濟ないイヤ〳〵〳〵中〳〵煩う樣な事じやないそーてどうしや〳〵サァなしよにもかしよにもおらだけ一人庄屋の伯父さまが引取て奉公ーろといひめすけど何の奉公所かい口惜いとくやーいで跡先思はず旦那寺へかけこんで坂東順禮するといふて笈摺もらひ國元をつゝ走つたもそんだに尋ね逢たら兄弟心一致に仕ヤてだゝァの敵が打たいばつかり道中すがらの艱難もろんだに逢か樂みに　詞「がひに苦勞とは思なんだ併逢たらかつばりとしよつ骨が扱た樣な　詞「コレそないな歎かつしやる手間で妹はるゝ〳〵尋てよう來て呉ためこがめらしというてくんさい姉さァとあやも泣入稚氣に長の旅路の憂苦勞思ひやるせも宮城野につゝくは末の松山を袖ま涙越涙なり歎の中も姉は猶妹が脊を撫おろし　詞「チヽ其樣に思やるも尤併し貴妹は父母よ永そやつた身の果報コレ此姉を見やいのう年貢にせおつてとゝ樣は水牢其苦を助ふばつかりにコレ此廓へ身を

賣たを思ひ返せば十二年となたは五ッ子顔さへ見知すと、様の御最期や母様の死目にも逢ぬといふ悲しい不幸なはかない事が有うかいの斯した事とは露しらず此妹は健なか知ぬと、様か、様お煩ひでも有うならよもやしらしてたもらう物便のないを杖柱首尾よふ年を勤たら國へ歸てお二人に樂させまして どうしてと色やうは氣を嗜んて

白石　勤大事といひ号の殿御の事もろなたの事も戀しなつかゝ思ふのをたのしみ暮したかひもなふ名乘逢たは嬉しいが悲しいはなゝ聞姉が心

咄新吉原　も推してたもいのと手を取替す姉妹が涙々を立聞も貰ひ泣して立わけの暖簾もぬる、斗也つもる噺しは富士の山かず〳〵多き涙の隙詞

「とんな事聞ふ端か借讀だる曾我物語兄弟の人々の終よは父御の敵討コリヤ泣て居る所じやないわいのヤ、是肝心の事を忘れて居た此姉が云号の夫此江戸に居しやんすとの噺し其お方の名所定めて覺て居やらうのうソリヤせはしさに何も聞ないヲ、モそれを知ぬといふ事が有物かいのろふいふ事なら敵の顔もろれしらないでよいものか月眼のてつかな鼻のひらたい男ぶりモウよい〳〵壁に耳御涙人とろ

なされたれ面緒たゞしい武士の娘ヲ、めらし姉妹じやて、おのれやれ敵討いで置ふかヲ、よふいやつた出しやつた幸與の大騒ぎあれに紛れて此家を立退ろうじや〳〵と妹が帶しめ直し我身も倶に小妻かいしよげ身おしらへ立退んとする所へ暖簾引切かけ出る亭主コリヤどおへヲ、旦那様のいつの間におりや最前からァいやたつた今爰へ來たがわがを達は敵サテかたい約束の男が有故こゝを斷落コレ惡いぞや〳〵そしてマァ其田舍娘をしつて居やるかァイイ、エ〜るまいてい〳〵昨日淺草で抱へて戻つたはいのふ旦那様私しが今の噺サァ聽たでもなゝ聽ぬでもそれ聽れたら赦さぬと突出す懷劍さすがの兄弟鏡臺のかゞみ追取丁〳〵はつしおりヤ　詞「何と違ふた物か違はぬ物は夫兄弟ナ此鏡臺のかゞみに移る二人の顔似たりや似たり花あやめ杜若其五月雨のくらき夜よ敵を討たる曾我兄弟假名本の曾我物語爰にあり合おそ幸おれが讀で聞ふそ光陰おしむべき時人を待ざるおとはり日間行駒つながぬ月日重りて一まんは十三才に成にけりナ　詞「此道理河津の三郎祐重と云名有勇者大名の息子殿でさへ五ッや六

ッの頃なも思ひ立れた親のかたきなま大ていの事であければ討れぬ物じやコレヤ聞きや大名の後室共云れる人が曾我の太郎祐信殿へ二度の嫁入せられたも謀又息子の箱王丸をいとしなけに坊主にせうと云れたも敵工藤祐經に油斷させふ爲斗其年月の憂難苦無念口惜い事の有ぢやう是迄何ほど芝居の狂言は取組でして見せる繼爺の祐信殿も大名役に立ずの貧乏人や後ゆびをさゝれたも兄弟の子供衆に實父の敵が討せたい武士の意氣地ぢやや是陰德と云大義心其上鬼王庄司左衛門といふて伊東家の老臣が有て幼少な子供衆に書は終日劔術稽古夜もすがら机の上忠孝の道を敎成人の後に及んで兄貴を十郎祐成弟御を五郎時宗と名乘らせたも北條殿といふ烏帽子親が有たさかい近い譬へはおれが樣な不粹むくつけな親方でも親方じやと思ふてたもるしこちも亦抱ノ奉公人じやと思へば何事によらずひけを取しとむないアヽおんな事は云いでも知た事じやが今の樣な噺を聞ばおれりや見逃したいコレ〳〵爰を聞きや首尾ようそなたが逃果てからが悲しい事は遠國生れしつかりとした心當かなふて江戸中をうろつき

白石咄新吉原

やたを內人の者共が見付何所そこよ居ぬようといふ事聞てアヽゑいわい打捨て置とは親方の身でどふも云れぬろりやモわがみ達斗でもない此廓へ來る奉公人に親孝行か夫の爲でないものは一人もないれも孝行じやおれも貞女じやとそれなりけりに仕舞てはおつちもおやま商賣取置ねばならぬおれよ成人の息子でも有て抱の新造呼出したり色狂ひよ身を打と聞ばヤィおくどうめぼいまくつてのける勘當じやと強異見する親の身が人樣の大事の息子殿が見へるときやつ放錢じやわいのコレ賴もしろうなお客じや程に隨分大事にかきやと智慧を付るヤ此樣な得手勝手な商賣はなけれどおりや是浮世の身過世過そふ云身分の此おれでも慈悲と情といふ事は不斷心よ忘れはせぬヤちよつと云て見樣なら此宗六は最前いふた鬼王庄司左衛門じやと思の外に烏帽子親の北條殿と云樣な後楯でも出來てからヤさつきの樣に從ひ込で突かゝつた懷劔おれにさへつい擲き落される樣なとでは十まさか敵よ出合た時すつぽんの間にも合ぬほどにおれが云詞に隨ひノコレ〳〵此道をも稽古して鍛練の熱した上ではぐつと〳〵と尻持

合點コレ駈落の尻もつて行ふとは云まいせく所てはない程に大事の勤欠落せふとは無分別お客大事に勤てたも合點がいたかとつど〳〵に曾我物語の引くゝり讀切諸釋一方を頼もしゞ有亭主なり二人は飛立添泪身にも胸にも有り余るエ〻有がたふおざんすと姉も拜めば妹も只ふゝ拜む斗也「ヲヽ、嬉いのは尤義を見てせざるは勇なしわがみ達の樣な奉公人見立て召かゝへたといや仰山ながらおれが目鏡もおよろ違はぬ禮いふ事も何にも及ばぬノ人の目鏡に悟られぬ樣隨分共けはひ化粧も美しうして奥の座敷へソレやり人の政は居ぬか湯をもつて來てやれいやゐしゞりは居ぬかと呼ひ出ていひ付るのも賣物に花も實も有る轡の惣六吉粹の澱まぬ座敷は大騒ぎ幇間末社が彈三味に乘て呑やら謠ふやら現だはひの喜見城異見上手の親方がおもる情に宮城野が妹を部屋に奥座敷引別れてぞ入よける

白石咄新吉原

明治廿二年六月卅日　印刷
同　七月十日　出版

發行者　京橋區銀座二丁目十番地　三浦伊七
印刷者　日本橋區新右衛門町十番地　町田宗七
發賣元　京橋區銀座二丁目十番地　盛堂